

松岡佑子訳 『ハリー・ポッターと賢者の石』研究

—イギリスの子どもの日常に関わる表現を手がかりに—

仲 山 可那子

1. 序論

1.1. 作品について

イギリスの作家 J.K.Rowling 作 Harry Potter シリーズは、日本でも人気のファンタジー作品である。1997年にイギリスで初版が発売されると瞬く間に売り切れとなり、何度も増刷された。第1巻がアメリカで出版されると、1998年の児童書ベストセラー第1位となり映画化された。日本では1999年に第1巻の *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) の翻訳『ハリー・ポッターと賢者の石』が出版された。同シリーズは全7巻からなり、初版から20年経った現在でも、国や世代を問わずその人気が衰えることはない。

第1巻の魅力は次の3点である。1つめは、子どもの成長物語であるということである。ハリー、ロン、ハーマイオニーの3人が魔法学校で学び、様々な課題や大切な人の死に直面し、それを乗り越えて一人前の魔法使いになる成長の過程が描かれている。2つめは、様々な魔法が描かれていることである。魔法によって現実にはありえない事柄が表され、作品にユーモアが盛り込まれている。3つめは、イギリス特有の現実の子どもの生活の様子が描かれていることである。物語の舞台であるホグワーツ魔法魔術学校での授業や日常生活から、実際のイギリスの子どもの生活の様子が見て取れる。これらの魅力は、日本語に翻訳されても、日本の読者に伝わっているように思われる。その中でも特に3つめの、イギリスの子どもの生活の特徴が、翻訳において読者の理解の障壁とならずにいかに乗り越えられているのかは、注目すべき点である。

1.2. 先行研究

Harry Potter シリーズについて、原文と訳文の英和対照に特化した研究は管見の限り見当たらない。しかし、翻訳以外に焦点を置いて論じた学術論文は少なくない。坂田

(2014, 2015) は、イギリスの人種差別意識と階級意識についてシリーズ全7巻をそれぞれ分析し、現代社会との結びつきを明らかにしている。差別や階級制度はイギリスに古くから存在する社会的な問題であり、本研究で論じるイギリスの子どもの生活全体にも密接に結びついている要素である。

また、菱田 (2013) は、ハリー・ポッターシリーズが単に学校物語であるということだけでなく、イギリスの伝統的な学校を描くことで、その学校に対する批判を表していると述べている。物語の舞台はhogwarts魔法魔術学校であるが、そこにはイギリスの伝統的な寄宿制のパブリックスクールの特徴が反映されている。それと同時に、菱田 (2013) は、イギリスの階級社会で重要な役割を果たすパブリックスクールが描れることで、教育機関において特権的な人々がそれに属さない人を支配するというイデオロギーを批判していると述べている。このようにハリー・ポッターシリーズにイギリスの伝統的なパブリックスクールが描かれているとすれば、そこでの学校生活は日本の子どもたちに馴染みのないことが多い。そのため、原文と日本語訳を対照することで学校という場における両国の子どもたちの生活の違いを浮き彫りにでき、それらの文化的差異が翻訳でどのように乗り越えられているかを検証することができる。

上記の他に注目したいものに、野波 (2002) がある。これは、イギリス版とアメリカ版における語彙の比較をしたもので、この論文によると、アメリカ版には次の2つの特徴がある。1つは、アメリカの子どもを対象とした語彙に変更されたこと、もう1つはアメリカで馴染みのないものに、説明を付加している箇所があるということだ。英米の文化の違いにより、そのようなずれが表れていると指摘しているのである。英語圏同士でもそのような改変が対象とする読者のために行われるとなると、言語も文化も全く異なる日本語版ではさらに大きな改変やずれが生じているのではないかと推測する。

以上の先行研究は、Harry Potter シリーズの翻訳研究ではないが、物語の様々な側面を論じており、それらはイギリスの子どもの生活に関わっている。そのため本研究では、先行研究で論じられた側面を踏まえ、原文と日本語訳とのずれを明らかにしていきたい。

1.3. 研究の動機と目的

Harry Potter シリーズ第1巻の *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) では、1.1. で述べたように、3つの魅力がある。その中でも特に、3つめのイギリスの生活の特徴については、翻訳の仕方によっては読者の理解の障壁になりうる。そこで、本研究では、それが松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』(1999) においてどのように乗

り越えられ、読者に分かりやすく伝わっているかを考えたい。

そして、上述の「イギリスの子どもの生活」を表しているのは学校と学校外の日常生活であると考え、イギリスと日本の学校や日常生活には、多くの違いがあることを確認する。例えば、林（2001, p.76）によると、日本とイギリスでは、学校のカリキュラムや学期わけの制度などが異なる。特に、物語の舞台であるhogwarts魔法魔術学校は、イギリスの伝統的な寄宿学校の制度が反映された学校である。こうした寄宿学校は日本の子どもたちには馴染みがないものである。そのため、訳文では、説明の付加や省略など、様々な工夫がなされていると推測する。実際にそうした例もあり、イギリスの小学校を舞台にした『わんぱくタイクの大あれ三学期』（ケンズ著 松本訳, 1981, p.177）で翻訳者は、「英国の学校制度は大変複雑でわかりにくいので、便宜上、日本流に訳しましたことを、おことわりしておきます。」と述べている。

以上に述べたことを前提とし、原書と翻訳書の表現のずれを考察することにより、イギリスと日本の学校制度をはじめ、両国の子どもたちの日常生活の違いを浮き彫りにし、そうした違いがいかに訳者の工夫によって乗り越えられているかを考察する。日本の子どもたちにとってハリー・ポッターの魅力が減じることなく届けられたのか確認することは、翻訳研究の課題である。

2. 本論

2.1. 研究の方法

「イギリスの子どもの生活」を表しているのは学校と学校外の日常生活であると考え、この2点が表現された箇所の子どものイギリス版、日本版、アメリカ版の原文と訳文を抽出し、一覧表にまとめた。抽出する際、翻訳において言葉が付け加えられている点と省略されている点に注目した。抽出した具体例の中には、物語の文脈や会話の表現によって付加または省略されたものもあったが、本研究ではイギリスとは異なる文化を持つ日本の読者がイギリスの子どもの生活を理解するための手助けになるよう、言葉の付加や省略がなされたと考えられるものに限定することとする。その考察の対象となる例のみに絞ったものを新たに一覧表にまとめた。それらの具体例を分類し、見えてきた特徴を考察する。

2.2. 学校について

イギリスの学校と日本の学校にはいくつもの違いがある。林（2001, p.76）によると、

日本とイギリスでは、学校のカリキュラムや学期わけの制度などが異なる。イギリスには伝統的な寄宿学校の制度があり、寄宿学校の生徒はそれぞれが寮で生活する。物語の舞台である hogwarts 魔法魔術学校には、その寄宿制度が反映されている。しかし、そのような学校生活は日本の子どもたちには馴染みのないものである。このような、日本の読者が理解しにくいイギリスと日本の差を埋めるために翻訳でどのような工夫がなされたのかを検証する。

2.2.1. 学校制度

まず、学校制度について注目し、以下に例を挙げる。

原文例 1) When September came he would be going off to ⁽¹⁾secondary school and, for the first time in his life, he wouldn't be with Dudley. Dudley had a place at ⁽²⁾Uncle Vernon's old school, Smeltings. Piers Polkiss was going there, too. Harry, on the other hand, was going to Stonewall High, ⁽³⁾the local comprehensive. (p.28, ll.15-20) (下線引用者、以下同様)

翻訳例 1) 九月になれば⁽¹⁾七年制の中等学校に入る。そうすれば生まれて初めてダドリーから離れられる。ダドリーはバーノンおじさんの^{ぼこう}母校、⁽²⁾「名門」私立スメルティンズ男子校に行くことになっていた。ピアーズ・ポルクスもそこに入学する。ハリーは⁽³⁾地元の普通の公立ストーンウォール校へ行くことになっていた。(松岡 p.50, ll.12-16)

原文例 2) 'Have a good ⁽¹⁾term,' said Uncle Vernon with an even nastier smile. (p.69, ll.7-8)

翻訳例 2) 「^{しんがつ}新学期をせいぜい^{たの}楽しめよ」
バーノンおじさんはさっきよりもっとにんまりした。(松岡 p.137, ll.11-12)

例 1 (1) secondary school は「中等学校」のことだが、日本語訳では「中等学校」に「七年制の」という説明が付け加えられている。実際には、イギリスに七年制の中等学校は存在していないが、「イギリスの学校系統図」(文部科学省)によると、中等学校(日本の中学校にあたる)に5年、その後シックスフォームと呼ばれる学校(日本の高等学校にあたる)に2年、合わせて7年間在学することがこれに相当する。このため、学校

の就学年数が異なる日本の読者に向けて secondary school の訳出の際に「七年制」を補ったと考えられる。この補いがあることで、日本の読者は、ハリーが11歳で入学して7年間の学校生活を送るということが分かる。

例1(2) Uncle Vernon's old school, Smeltings の日本語訳には「名門」「私立」「男子校」が補われており、「名門」は鍵括弧をつけて強調している。これは、「普通の」と付け加えられている例1(3)の the local comprehensive との差を明確にするためと考えられる。イギリスの中等学校は、public school, grammar school, comprehensive school の3つに分けられる。public school は学費を支払えば入学できる私立の学校である一方、grammar school と comprehensive school は公立で学費は無料だが、試験の結果により、学力レベルの高い grammar school に行くか、それよりは低いレベルの comprehensive school に行くかが決められる。最もステイタスが高いところが public school、その次に grammar school、comprehensive school という順になる(ペルトン著 渡辺訳, 2004, pp.44-45)。つまり、例1(2)で「『名門』私立」と補ったことにより、イギリスの上流階級の子どもたちが通うパブリックスクールを表し、例1(3)で「普通の」と補われていることから、comprehensive が名門校ではなく、階級の低い家柄の子どもたちが通うということが分かる。

また、イギリスのパブリックスクールについて、オールドリッチ著 松塚・安原監訳(2001, p.26)は「イングランドでは、男子パブリック・スクールは依然、政治家をはじめ、政府であれ産業・商業界であれ専門職の世界であれ、権力の座にある人々を育む主たる苗床である。」と述べている。この記述から、例1(2)の「男子校」の補足は、Uncle Vernon's old school, Smeltings を、パブリックスクールで且つ権力者を育成するような男子校であることを表している。松岡は「男子校」と付け加えることで、Uncle Vernon's old school, Smeltings と the local comprehensive のステイタスに差をつけて表現し、学校間のステイタスがはっきりしているというイギリスの学校制度の特徴を翻訳で強調しようとしたと考えられる。

そして、例1(2)の Uncle Vernon's old school, Smeltings と例1(3)の the local comprehensive について、アメリカ版ではイギリス版の原文と同様に英語で書かれているにもかかわらず、異なる表現に変更されている。例1はアメリカ版(以下、A版) *Harry Potter and the Sorcerer's Stone* (Rowling, 1997)では次のように書かれている。

A 版例 1) When September came he would be going off to ⁽¹⁾secondary school and, for the first time in his life, he wouldn't be with Dudley. Dudley had been accepted at ⁽²⁾Uncle Vernon's old private school, Smeltings. Piers Polkiss was going there too. Harry, on the other hand, was going to Stonewall High, ⁽³⁾the local public school. (pp.31-32, ll.15-4)

アメリカ版の例 1 (2) は Uncle Vernon's old private school, Smeltings と書かれており、“private” が挿入されている。これは、イギリスとアメリカの学校制度が異なるからである。『リーダーズ英和辞典第 1 版』(2000) は“public”に「公立の、公共の」、「private」に「私有の、私の」という意味があることを示している。2 つの単語は対義語であるが、“public school” “private school” の意味がイギリスとアメリカでは逆転する。“public school” はイギリスでは伝統的な私立中等教育学校を表すが、アメリカでは公立学校を表すのである (菱田, 2013, p.95)。一方、アメリカでは私立の学校を“private school”という。同じ英語圏でも学校制度や名称の違いがあるため、アメリカ版ではアメリカの読者に馴染みのある語彙に変更して理解しやすくしている。その反面、語彙が変更されることで作品の舞台であるイギリスの学校制度や名称は読者に伝わらないと考えられる。

例 2 では、term が「学期」でなく「新学期」と翻訳されている。この場面は、Harry がホグワーツに入学する前日の 8 月の最終日の会話である。イギリスでは 9 月から新学年が始まるが、日本では 9 月が 2 学期または後期の始まりであるため、学期の区切りに対して認識のずれがある。このずれが読者の理解を妨げることはないように「新学期」と表記していると考えられる。物語の文脈で 9 月とわかり、「新学期」と訳すことで、イギリスでは 9 月に新学期が始まるということを伝えている。

学校制度に関する部分の翻訳では、言葉を付け加えることでイギリスの学校制度を日本の読者が理解できるようにしている。イギリスは日本と就学年数や学期わけが異なっているため、日本の読者がそれに気づき理解できなければ、物語の内容理解が妨げられてしまう。そこで、松岡は、言葉の付加によってイギリスの学校制度を翻訳でも表現し、日本の読者にも分かるように表現している。また、イギリスの伝統的な階級制度が、学校制度を通して子どもたちの生活にも密接に関わっていることも強調されている。イギリスの読者は階級意識に馴染みがあるため、説明を加えずとも文章から学校のステイタスの違いを読み取ることができるだろう。その一方で、日本の子どもたちにとって階級

意識は馴染みのないものであり、明確に書かれていなければイギリスの学校間の階級差は伝わりきらないと考えられる。だが、日本でも「普通」の公立校と「有名」私立校には違いがあるため、イギリスの学校間の階級差と近いものはある。そこで松岡は、原文に書かれていないが日本でも学校の違いを表すときに用いる言葉を付加することで、階級意識の薄い日本の読者に、イギリスの学校間の階級差を気付かせようとしている。

2.2.2. 学校の風習

次に、学校の風習に注目する。学校制度のように規則として定められたこと以外で、イギリスの学校ならではの伝統や習慣が表れているところを抽出する。以下に原文と訳文の例を挙げる。

原文例 3) ‘What’s your Quidditch team?’ Ron asked.

‘Er - I don’t know any,’ Harry confessed. (p.80, ll.38-39)

翻訳例 3) 「君、クィディッチはどこのチームのファン？」ロンが尋ねた。

「うーん、僕、どこのチームも知らない」ハリーは白状した。(松岡 p.161, ll.4-5)

原文例 4) Harry had never even imagined such a strange and splendid place. It was lit by thousands and thousands of candles which were floating in mid-air over four long tables, where the rest of the students were sitting. These tables were laid with glittering golden plates and goblets. (p.87, ll.18-22)

翻訳例 4) そこには、ハリーが夢にも見たことのない、不思議ですばらしい光景が広がっていた。何千というろうそくが空中に浮かび、四つの長テーブルを照らしていた。テーブルには上級生たちが着席し、キラキラ輝く金色のお皿とゴブレットが置いてあった。(松岡 p.173, ll.13-15)

原文例 5) ‘When I call your name, you will put on the hat and sit on the stool to be sorted,’ she said. (p.89, ll.11-12)

翻訳例 5) 「ABC 順に名前を呼ばれたら、帽子をかぶって椅子に座り、組分けを受けてください」(松岡 p.177, l.14)

例3では、「ファン」という言葉が補足されている。「ファン」という言葉によって、Quidditch がリーグスポーツであることと、your team が応援しているチームであることが日本の読者に分かる翻訳となっている。

また、この場面には、イギリスのスポーツと階級制度の関係が表れているとも考えられる。階級制度が根強いイギリスでは、親しみのあるスポーツも階級によって異なる。菱田 (2013, p.94) は、イギリスでは階級によって楽しむスポーツが異なり、上流階級の人はポロというスポーツ、労働者階級の人はサッカー (football) を楽しむことが多く、「ハリー・ポッター」シリーズのクィディッチはイギリスの上流階級が楽しむポロに似ていると述べている。また、ロンがサッカーを知らないことがわかる場面があり、魔法族は人間 (マグル) の生活に無関心であるとも指摘している。これらを踏まえると、クィディッチを楽しむ魔法族は、自分たちがマグルよりも階級が上だと認識していることが分かる。つまり原文には、純血の魔法使いとマグルとの間に一線を画すロンのクィディッチに対する愛着と、代々魔法使いの家系 (純血) のロンにとってはクィディッチが一番身近で、魔法族なら知っていて当たり前前のスポーツであるという考え方が表れている。

一方、日本では階級によって楽しむスポーツが異なるということには馴染みがないが、日本人が自分の好きなものについて、その「ファン」であるという意識を強く表すことは珍しくなく、ファンである自分とそうでない他者との間には差が生まれる。純血のロンがマグルの生活を知るハリーに対して、魔法界では知っていて当然のクィディッチをどのくらい知っているのかを試していることには、自分と相手の間に距離を置こうとする階級意識が表れている。つまり、魔法族なら「ファン」として応援するスポーツについて、マグルのもとで育ったハリーはその存在さえ知らないというところに、階級意識が表れているのである。

例4では、「上級生」と訳されており、「学年が上」であるという意味が付け加えられている。入学式に参加しているのは在校生ということだけでなく、生徒間の上下関係が表れる翻訳になっている。この場面は、全校生徒が大広間に集まる場面だが、寮ごとに着席しているため、寮内の生徒の関係が現れると考えられる。ホグワーツの寮では全学年が共同生活をしており、優秀な上級生が寮生活を指揮する監督生を務めている。イギリスでは、生徒同士が学年を問わず名前呼び合うなど、言語表現上では生徒間の上下関係がはっきり分かるわけではない。しかし寮内では、下級生が各寮のリーダーである監督生に従わなくてはならないなど、全学年が共同生活をする寮内で生徒の上下関係は

明確である。一方、イギリスの学校の寮生活は日本人には馴染みがない。そのため、寮ごとに全校生徒が着席した場面で、the rest of the students を「上級生」と訳すことで、日本の読者がイギリスの学校の寮内では生徒同士の上下関係が明確であることを認識できる。また、日本には、生徒の間に先輩後輩といった年齢による上下関係があり、「上級生」という言葉で先輩後輩の関係を想起させる。イギリスの学校の寮生活は日本人には馴染みがないが、その中でも生徒同士の上下関係という日本人に馴染みがあることが描かれていることは、イギリスの寮生活における上下関係について、日本の読者の理解を助けようとしていると考えられる。

例5では、「ABC 順に」が付け加えられている。この文のあとに、順番に新入生の名前が呼ばれる場面が描写されるが、その順序が原文、翻訳ともにファミリーネームのアルファベット順である。日本の学校では、名前を呼ぶときには姓の「あいうえお順」が使用されることを考えると、日本の平仮名と対照させ、イギリスではアルファベット順であることを明確にしているともいえる。「ABC 順に」と付け加えることで、日本の読者が、登場人物の名前が呼ばれる順番に疑問を持つことのないように配慮した翻訳になっている。

学校の風習に関する部分の翻訳では、魔法族とマグルや生徒同士の関係、イギリスの学校の風習が読み取れるような工夫がなされている。学校制度にも階級が表れていたが、ロンとハリーの会話にもクイディッチを通して階級意識が読み取れるところがあった。日本の子どもたちは、自分の家柄や階級を意識して友達関係を構築する習慣はないだろうが、子どもの会話に表れる階級意識を翻訳を通して伝えようとしている。以上より、松岡は言葉を付け加えることでイギリスの学校の風習を失わずに伝えようとし、日本の読者がイギリスの子どもの学校生活を感じとることができるように工夫している。また、寮の生徒の間の上下関係は、翻訳によって日本の先輩後輩のような関係を読み取ることができるため、日本の読者がイギリスの学校の寮生活の様子を理解することができる。反対に、原文にはない言葉を付け加えて、イギリスと日本の文化の違いを明確にしているところもある。これは、松岡がイギリスの学校の風習を言葉で明確に表現して、物語の舞台がイギリスであるということが薄れないようにしたものであると考えられる。

2.2.3. 学校についてのまとめ

ここまで、学校についての翻訳を分析してきた。これらの分析からいえることは、日本の読者がイギリスの制度を理解することと、イギリスの特徴を引き立たせることの2

つの理由から、言葉が付け加えられているということだ。日本の読者に分かりやすい表現を目指すゆえに、物語の舞台であるイギリスの雰囲気が失われる翻訳作品もあるが、松岡は、日本の読者への分かりやすさと、イギリスの雰囲気の保持の両方を意識していると考えられる。

2.3. 日常生活について

イギリスの子どもの生活は、学校外でも日本とは異なることが多くある。 Hogwarts は寄宿学校であるため、生徒は授業以外の時間でも学校の敷地内で過ごしている。しかし、そこには学校外でも見られるであろうイギリスの子どもの日常生活が色濃く反映されている部分がある。そこで、物語の場面としては学校内の出来事であるが、それらは家庭生活など学校外でも見られるイギリスの日常生活の特徴であるということを前提に、日本とは異なるイギリスの日常生活の特徴を翻訳でどのように乗り越えたのかを検証する。

2.3.1. 食べ物

まず、イギリス固有の食べ物について、以下に原文と訳文の例を挙げる。例6、例7については、アメリカ版で語彙が異なっていたため併記する。

原文例6) They sat by the hour eating anything they could spear on a toasting fork - bread, crumpets, marshmallows - and plotting ways of getting Malfoy expelled, which were fun to talk about even if they wouldn't work. (p.146, ll. 30-34)

A 版例6) They sat by the hour eating anything they could spear on a toasting fork - bread, English muffins, marshmallows - and plotting ways of getting Malfoy expelled, which were fun to talk about even if they wouldn't work. (p.199, ll.12-16)

翻訳例6) 何時間も座り込んで、串に刺せるものはおよそ何でも刺して火であぶって食べたーパン、トースト用のクランペット、マシュマローそして、マルフォイを退学させる策を練った。(松岡 pp.290-291, ll.15-1)

原文例7) A hundred fat, roast turkeys, mountains of roast and boiled potatoes, platters of fat chipolatas, tureens of buttered peas, silver boats of thick,

rich gravy and cranberry sauce – and stacks of wizard crackers every few feet along the table. (p.149, ll. 30-34)

A 版例 7) A hundred fat, roast turkeys; mountains of roast and boiled potatoes; platters of chipolatas; tureens of buttered peas, silver boats of thick, rich gravy and cranberry sauce – and stacks of wizard crackers every few feet along the table. (p.203, ll.15-19)

翻訳例 7) 丸々太った七面鳥^{しちめんちよう}のロースト百羽^{やまも}、山盛りのローストポテトとゆでポテト^{おおざら}、大皿に盛った太いチポラータ・ソーセージ^{ふかざら}、深皿いっぱい^にのバター煮^{ぎん}の豆^{うつつ}、銀の器^{にくじる}に入ったコッテリとした肉汁と克蘭ベリーソース。テーブルのあちこちに魔法^{まほう}のクラッカーが山のように置いてあった。
(松岡 p. 297, ll.7-10)

原文例 8) Flaming Christmas puddings followed the turkey. (p. 150, l.4)

翻訳例 8) 七面鳥の次はブランデーでフランベしたプディングが出てきた。(松岡 p. 298, l.2)

例 6 のアメリカ版では English muffins と変更されている。crumpets はアメリカでは馴染みがないが、English muffins はイギリスで生まれてアメリカで広まった食べ物である (井上, 2007, p.171)。そのため、アメリカの読者には English muffins の方が分かりやすい語であると判断したと考えられる。しかし、crumpets と English muffins は違う食べ物である。つまり、イギリスの読者とアメリカの読者は別の食べ物を思い浮かべて読み進めることになる。アメリカの読者にとって分かりやすく語彙が変更されているが、イギリス固有の食べ物の特徴が失われているのである。一方、日本語訳では、crumpets に「トースト用の」と付け加えている。ベルトン著 渡辺訳 (2004, p.118) によると、crumpet は、直火で焼いて食べる塩味のパン菓子である。イギリス人にとって crumpets は馴染みのある食べ物だが、日本の読者は「克蘭ベット」という単語だけでは、どのような食べ物なのか想像できない。しかし、「トースト用の」と食べ方の説明が付け加えられると、読者は「克蘭ベット」が焼いて食べるパンのようなものと理解できる。さらに、crumpet が塩味のパン菓子であることも日本の読者に伝えたとすれば、本文中に「克蘭ベット」とだけ表記し、注を付けて「イギリスでポピュラーな塩味のパン菓子。直火で焼いて食べる。」という説明を付け加える方法があるだろう。

例7の fat chipolatas について、OED オンラインによると、chipolata は chipolata sausage を省略した語であり、“a small spicy sausage; also, a dish or garnish containing these sausages.” とある。アメリカ版では fat が書かれていない。アメリカ人に fat を chipolata の形容詞として用いることについて尋ねたところ、fat をソーセージなどの食べ物の形容詞として用いることに違和感はないが、fat chipolatas というフレーズには馴染みがないということだった。なお、chipolata というソーセージはアメリカにもあるが、よく出回っているというわけではないという。このことから、fat は食べ物の形容詞として用いられるが、fat chipolata というフレーズには馴染みがないため、アメリカ版で fat を除いた表記がなされていると推測する。

一方、日本語では「太いチポラータ・ソーセージ」と翻訳されており、「ソーセージ」が付け加えられている。日本人は「チポラータ」という言葉に馴染みがない。しかし、「ソーセージ」だと分かればそれをイメージすることはできる。「チポラータ」という英語の音を残し、「ソーセージ」を付け加えることで、イギリスの食べ物であることを生かしつつ日本の読者がチポラータを知らずともソーセージの一種であることが理解できるような翻訳がなされている。

例8では、「ブランデー」が付け加えられている。クリスマスプディングはイギリスのクリスマスの食卓には欠かせないものである。このイギリスのクリスマスプディングは「ナッツと果物が入った、ブランデー風味の重厚なケーキ。」(ベルトン著 渡辺訳, 2004, p.118) と説明されている。「ブランデーでフランベした」と翻訳することで、クリスマスプディングがブランデーの風味であり、炎を見せて演出することが伝わる。日本人はプディングというと、いわゆるカスタードプリンを想像するが、「フランベ」の意味が分かる読者であれば「ブランデーでフランベしたプディング」から、日本のカスタードプリンのような冷たいものではないということが分かるだろう。しかし、イギリスの Flaming Christmas pudding 独特の色や形、イギリスのクリスマスに欠かせない普段よりも豪華なケーキであることは伝わりきらないと考えられる。翻訳において、その色や形、華やかさも表現しようとするれば、「ブランデーでフランベした、ナッツや果物が入ったクリスマスプディング」のように説明を加えることになる。しかし、この説明が文章中に書かれると、読者にとって読みやすい文章であるとはいえない。文章の読みやすさとイギリスの食べ物の特徴をより分かりやすく伝えることを考えると、文章中では「フレーミング・クリスマス・プディング」とカタカナ表記で翻訳し、注を付けてその説明を付け加えることが1つの手段として考えられる。このように、イギリス固有の食べ物

である Flaming Christmas pudding の食べ方や味、食感、イギリスの子どもたちがそれを見た時の期待感を日本の読者にも分かりやすく伝えようとすることを考えると、文化的差異を乗り越えることがいかに難しいかということが分かる。

例 6 から例 8 までは食べ物について説明加えられている部分について述べてきた。その一方で、翻訳において言葉を省略している部分もある。以下にその原文とアメリカ版、訳文の例を挙げる。

原文例 9) [...] they bought him a cheap lemon ice lolly. (p.24, l.31)

A 版例 9) [...] they bought him a cheap lemon ice pop. (p.26, l.11)

翻訳例 9) (中略) しかたなしにハリーにも安いレモン・アイスを買い与えた。(松岡 p.42, l.4)

例 9 の ice lolly について、アメリカ版では ice pop に変更されている。ice lolly と ice pop は同じ「棒つきのアイスクャンディー」を示しているが、主にイギリスでは ice lolly を用いる。イギリス英語とアメリカ英語には違いがあり、アメリカでよく使われる ice pop に置き換えたと考えられる。一方、日本語では「レモン・アイス」と訳されており、「棒つき」であることは省略されている。この訳文からは必ずしも「棒つきのアイスクャンディー」を想像するとは限らないため、ice lolly の翻訳として「レモン・アイス」は不十分である。この文章の直後でアイスをなめている様子が描かれていることから棒つきのアイスクャンディーであることがわかるため、「棒つき」の意味が訳文に反映されていなくとも大きなずれは生じさせないと考えることもできる。しかし、省略せずに訳したほうが、a cheap lemon ice lolly は棒つきのレモン・アイスであるということが明確になるとともに、その安さが際立つ。例えば、「レモン味の棒つきアイス」や「レモン味のアイスバー」という訳であれば、棒つきであることも伝わり、「○○味」とすることで安さが際立つのではないだろうか。この点で、「棒つき」の意味は省略せず、安さが強調される言葉を付け加えるほうが、日本の読者の理解をさらに深める効果があるのではないかと考える。

以上が食べ物についての翻訳の分析である。いずれも、食べ物そのものの名前をカタカナで表記し英語の音を残すことで、日本にはないイギリスの食べ物であるということを残しているが、カタカナ表記だけでは読者にとっての分かりやすさという点で不十分であると考えられる。そのため、松岡は、日本の読者にとって少しでも分かりやすい表

現にしようと、食べ方や風味の情報を加えるという工夫をしたと考えられる。しかし、その工夫には不十分なものもあり、原文に登場した全てのイギリスの食べ物の見た目や味の特徴が、翻訳で分かりやすく表されているとは言い切れない。また、省略されたところについては、省略することによって読者の理解を妨げているわけではない。しかし、省略せずに訳すか、文章の流れを配慮して注を付けるなどするほうが場面をより細かく描写し、日本の読者にとっては分かりやすいと考えられる。

2.3.2. 衣服

次に、衣服について、原文と訳文の具体例を1つ挙げる。

原文例10) They pulled on their dressing-gowns, picked up their wands and crept across the tower room, [...] the Gryffindor common room. (p.115, ll.25-27)

翻訳例10) 二人はパジャマの上にガウンを引っ掛け、杖を手に、寝室をはって横切り、塔のらせん階段を下り、グリフィンドールの談話室に下りてきた。
(松岡 p.228, ll.10-11)

例10の *dressing-gowns* の表記について、野波 (2002, p.181) がアメリカ版では “bathrobes” (Rowling, 1997, p.155) に変更されていることを指摘している。語彙の変更は、アメリカの読者にとって分かりやすくするための工夫であるといえる。しかし、アメリカでよく使われる語彙に変更してしまっているため、物語の舞台がイギリスであるという事実が薄れ、反対にお風呂上がりに着るもの連想させてしまう。一方、日本語では「パジャマの上に」と付け加えられている。*dressing-gown* は「パジャマの上に着る部屋着」(『リーダーズ英和中辞典第1版』2000) と定義されている。現代の日本では、子どもたちがパジャマの上にガウンを羽織ることはほとんどない。そこで、「パジャマの上に」と付け加えることで、ガウンの着方を明確にしている。しかし、英語の発音をそのままカタカナ表記にすると「ドレッシングガウン」と書くことができるが、松岡は *dressing* の部分を表記していない。「ドレッシング」は、サラダに使う「ドレッシング」を連想させるため、あえて英語の読みを生かさなかったのではないと思われる。日本の読者は、パジャマの上にガウンを着る習慣がなくとも、「ガウン」という言葉から上着のような羽織るものを連想することができると推測される。これらを踏まえて、松岡は「ドレッシングガウン」よりも「ガウン」の方が日本の読者にとって分かりやすい訳で

あると判断したのではないかと考えられる。

2.3.3. 宗教

次に、宗教に関する事柄の翻訳について、以下に原文と訳文の具体例を挙げる。

原文例11) Once the holidays had started, Ron and Harry were having too good a time to think much about Flamel. (p.146, ll.27-28)

翻訳例11) クリスマス ^{きゅうか}休暇になると、^{たの}楽しいことがいっぱい、ロンもハリーもフラメルのことを忘れた。(松岡 p.290, ll.13-14)

原文例12) They piled so much homework on them that the Easter holidays weren't nearly as much fun as the Christmas ones. (p.167, ll.25-27)

翻訳例12) 山のような ^{しゅうだい}宿題が出て、^{イースター}復活祭の休みは、クリスマス ^{きゅうか}休暇ほど^{たの}楽しくはなかった。(松岡 p.335, ll.4-5)

例11では、the holidays に「クリスマス」が付け加えられている。この文がある第12章の冒頭で、クリスマスが近いということは分かる。松岡は、クリスマスがきて学校が休暇になった場面で、あえて「クリスマス休暇」と翻訳し、クリスマスと休暇との関係を強調している。ホグワーツ魔法魔術学校の休暇とイギリスの学校の休暇の時期は全く同じであり、クリスマスは秋学期と春学期の間の休みになる（ベルトン著 渡辺訳, 2004, p.120）。イギリスでは、イエス・キリストの誕生日であるクリスマスに学校が休みになり家族や親しい者が集まって食事をしてお祝いするため、クリスマスが1年の中の重要な行事とされている。この期間は、日本の学校では冬休みに当てはまる。しかし、日本の学校の冬休みの場合、年末年始が休みになり、初詣など伝統的な新年の行事が大切にされているが、クリスマスは必ずしも休みになるとは限らない。そのため、イギリスと日本の休暇の時期は同じでも、休暇中に両国の伝統として重んじているものが異なる。このクリスマスを重視するイギリスの生活を翻訳に反映するために、「クリスマス」を付け足したと考えられる。

例12では、「復活祭」と訳した上で「イースター」のルビを付け加えている。復活祭はイエス・キリストの復活を祝う行事で、イギリスの子どもたちにとってはクリスマスと同様に一年の中で欠かせない行事とされている（ベルトン著 渡辺訳, 2004, p.125）。近年は日本でもクリスマスやハロウィンに次いで、イースターのイベントが増えてきて

おり、日本でも「イースター」という言葉は浸透しているが、それがイエス・キリストが復活したことを記念する「復活祭」というキリスト教の重要な行事であることを強く認識している人は少ない。このように考えると、日本でも浸透している「イースター」という言葉がルビで付け加えられたことで、「イースター」が「復活祭」つまりイエス・キリストの復活を祝う祭りであることが分かり、イギリスでは休暇になるほど重要な行事であることが表現されているといえる。また、イギリスの学校には春休みがなく、その代わりにイースターの休暇がある。寄宿舎で生活する生徒たちにとっても帰省や旅行の機会となっていると考えられる。

以上の宗教に関する部分では、キリスト教の重要な行事の翻訳において、言葉を付加することにより、イギリスの子どもたちの日常生活における宗教的な行事の重要性を強調していると考えられる。クリスマスやイースターはキリスト教の行事であるが、その重要性やイギリス文化の中での意味合いが日本でも知れ渡っているかどうかというと、疑問である。そこで、翻訳において語を付け加えたり、ルビを付けたりすることで、イギリスにおけるキリスト教の行事の意味と重要性を明確に伝え、学校の休暇など子どもの生活に影響しているということが読み取れるようにしている。何よりも、イギリスの子どもたちの生活にはそれらの行事が日常生活から切り離せないものであるということが分かる。

本作品にはキリスト教と魔法の両方が描かれているが、中世ヨーロッパの魔女狩りや魔女裁判からも分かるように、古くから魔法とキリスト教が共存することは禁制されてきた。魔法が本作品の魅力の1つとして描かれているにもかかわらず、キリスト教の行事も色濃く描かれていることには、原文の著者であるローリングの意図が込められているのではないかと考える。ホグワーツ魔法魔術学校では、人種や階級を問わず、様々な背景を持った生徒が共に生活している。ローリングはそのような様子を描くことで、人種や階級は違えども同じ空間に共存することができるということを伝えようとしているのではないかと考えられる。つまり、作品の中で魔法とキリスト教の描写を両立させていることは、相反するものが共存していても、平等で差別のない社会が成り立つということを伝えてしていると推測する。その一方で、翻訳ではキリスト教の行事の重要性が伝わるが、魔法とキリスト教の共存に対して問題意識を持たせるというわけではない。だが、読者が日本の子どもであると考え、魔法とキリスト教についての歴史的背景を翻訳で表現したとしても、それを理解することは難しく読みやすさに欠けると考えられる。著者の意図やそれに伴う歴史的背景など、作品に込められたメッセージを翻訳で表現す

ることと文章の読みやすさの両方のバランスを保つことの難しさが見てとれる。

2.3.4. 日常生活についてのまとめ

ここまで、日常生活についての翻訳を分析してきた。これらの分析からいえることは、イギリスの人々の生活を日本の読者に分かりやすく伝えようとするとともに、イギリスの特徴が薄れないようにするために、言葉を付け加えた翻訳がなされているということと、付加・省略では乗り越えられないものがあるということだ。松岡は、イギリスの日常生活の特徴を生かすことと日本の読者にとって分かりやすいことの両方を成り立たせるための工夫として、言葉を付加したと考えられるが、その工夫が十分とはいえない部分があることも確かである。また、イギリスの歴史的背景や宗教事情、それに対する子どもたちの考え方や気持ちを翻訳で表現することは、言葉の付加や省略では乗り越えられない問題であると考えられる。

2.4. ことばの暗示的意味

次に、ここまで述べてきた分析の項目に当てはまらなかったものもある。その中で重要なものに、ことばに暗示的意味があると考えた。以下に原文と訳文の例を挙げ、分析する。

2.4.1. 建造物の古さ

建造物について、原文と訳文の例を挙げる。

原文例13) Harry looked behind him and saw a wrought-iron archway where the ticket box had been, with the words *Platform Nine and Three-Quarters* on it. (p.71, ll.7-9)

翻訳例13) 振り返ると、改札口^{ふりかえ}のあったところに 9 3 / 4 と書いた鉄^{てつ}のアーチが見えた。(松岡 p.141, ll.11-12)

例13は、翻訳において省略がなされている。wrought-iron は「鍛鉄」という意味の単語だが「鉄のアーチ」と訳している。鍛鉄は鉄の一種で、19世紀のヨーロッパで建造物に多く利用されていた。しかし、現在は使われておらず、鉄を種類によって言い分けることのない現代の日本人の日常生活には馴染みのないものである。そこで、wrought-iron の wrought の意味を省略して「鉄」と訳すことで、読者がそのアーチを想像しやすくなっている。しかし、「鍛鉄」としなかったことで、昔の wrought-iron で作

られたアーチの古さが、翻訳では伝わりきらないと考えられる。実際に古い建物、古いものがそのまま残っていることは、イギリスの人々にとって珍しい光景ではない。イギリスでは、今では使われていない素材で作られた古いものに触れる機会が多いと思われる。その一方で、日本では、人々が最新のものを求める傾向が強いために、世界遺産などの特別な理由から残されるものを除き、古いものが次々に新しいものに変えられていき、古いものが常に身近に感じられる生活は実現されにくい。この古さが分かるように表現するとすれば、「古い鉄のアーチ」や「古びた鉄のアーチ」のように、古さを表す形容詞を補う方法があるのではないかと考える。読者に分かりにくいという理由で現在は使用されていないものを訳出から省いていくことは、読者の理解を促す反面、古いものが身近にあるというイギリスの生活の特徴が十分に伝わらないということにつながる。そのため、イギリスの文化的特徴を失わず分かりやすさを考えた訳出が必要であると考ええる。

2.4.2. 植物

植物について、以下に原文と訳文の例を挙げる。

原文例14) As for monkshood and wolfsbane, they are the same plant, which also goes by the name of aconite. (p.103, ll.14-15)

翻訳例14) モンクスフードとウルフスベーンは同じ植物^{しよくぶつ}で、別名^{べつめい}をアコナイトとも言うが、とりかぶとのことだ。(松岡 p.205, ll.8-9)

例14では、aconite を「アコナイト」と訳した上に「とりかぶと」と付け加えている。アコナイトととりかぶとは同じ植物を表す。しかし、日本でアコナイトという名称はよく知られているものではなく、「とりかぶと」の方がよく耳にする名称であり、毒がある植物という強い印象を持たせる。また、モンクスフードとウルフスベーンと並べて aconite の英語の音を生かし「アコナイト」と訳されている。つまり、英語の音を残して「とりかぶと」という毒のある植物だと分かる日本語を付け加えることで、原文を生かしながら日本の読者が理解できるような訳になっているといえる。さらに、例13の文の話者は魔法薬の授業を行うスネイプ先生で、この場面では、生徒が恐れるほど不気味な雰囲気醸し出すスネイプ先生が描かれている。「アコナイト」が「とりかぶと」だと認識され、毒を持つことが明確になることで、場面の不気味さを強調するという効果を持つとも考えられる。

2.4.3. ことばの暗示的意味のまとめ

以上がことばの暗示的意味がある 2 例の翻訳の分析である。現代のイギリスと日本のどちらでも使われていないものは言葉が省略されている。日本の読者が滞りなく読み進められるようになっているが、現代には馴染みがないという理由で省略されていなければ、イギリスの実際の生活環境や原文に表れている情景がさらに細かく読者に伝わったのではないかと考える。また、言葉が付加されたものでは、英語の発音を残しつつ、日本の読者も場面の状況がより明確に理解できるようになり、言葉に暗示的に含まれた意味も分かるようになっている。

2.5. 個別言語の特徴

以上の分析の他に、登場人物の名前に隠された意味について言及する。ハリー、ロン、ハーマイオニーの 3 人の名前を見ると、Ronald (Ron:ロン) と Henry (Harry:ハリー) は、イギリスらしい名前であるのに対し、Hermione (ハーマイオニー) はギリシャ神話に関係するような名前である。発音やアクセントを見ても、Henry と Ronald はどちらも 2 音節で第一音節に強勢を持つが、Hermione は 4 音節で第三音節に強勢を持つ。この名前の特徴は、ハリーとロンは魔法族でハーマイオニーはマグルの魔法使いという、3 人の生い立ちや背景につながると考えられる。原文の読者が登場人物の名前を見た時、ハーマイオニーの名前には他の 2 人とは違うイメージを持ち、魔法使いの家系にイギリス風の名前、人間に異国風の名前が付いている点に作者のひねりを感じ取るのが、翻訳を読んだ人には、カタカナの人名であることしか伝わらない。また、主要な登場人物の 1 人である Hagrid (ハグリッド) の名前にも、隠れた意味がある。OED によると、hagridden が hagrid という形でも用いられ、その意味は「悪夢」・「醜い姿に悩まされた」など、非常にネガティブな意味である。原文でもハグリッドが話す英語は訛っており、読者に他の登場人物とは違う風変わりな人だという印象を持たせる。その一方で、物語の中では、ハグリッドはいつもハリーの味方で優しくユーモアにあふれた人物として描かれている。イギリスの読者であれば、原文から Hagrid の意味と人物の性格に違いに気づき、そこに面白さを感じることができるとは思えないが、日本語で「ハグリッド」と書かれていても、人名であること以外に意味は読み取れない。このように英語の名前であるからこそ読み取れる意味は、日本の読者がカタカナで書かれた名前を見るだけでは全く想像もつかない。その中で、カタカナ表記でもハーマイオニーの名前がハリー、ロンと並ぶと際立って長いこと、ハグリッドの名前に濁音が 2 個入っていることは、日

本語の読者にもこれらのキャラクターの異質性を感じさせる幸運な結果となっている。このように、登場人物の名前は、本作品の翻訳において乗り越えることが困難な言語的特徴の1つといえる。

3. 結論

本研究では *Harry Potter and the Philosopher's Stone* (1997) の松岡佑子訳『ハリー・ポッターと賢者の石』(1999) において、イギリスの子どもたちの生活がどのように訳出されたのかを考察してきた。

まず、学校に関して、イギリスと日本では学校の制度や風習が異なっており、それらについて読者の理解を補うために言葉が付け加えられている。日本の制度や風習に置き換えて翻訳するのではなく、イギリスの制度や風習を生かしつつ日本の読者がそれらを理解できるように言葉を補っている。

日常生活に関しては、日本の読者に馴染みのないものについて、その見た目や特徴の詳細を補うことで、日本の読者にとって分かりやすく、イギリスの日常生活の特徴が生かされた翻訳になっている。イギリス特有の事物を日本のものに置き換えてしまうのではなく、カタカナ表記やルビを入れて英語の発音を生かし、単語の意味や説明を補うことで、松岡がイギリスの子どもの生活の特徴や固有の事物の特徴を失うことなく、日本の読者に伝えようとしていると考えられる。しかし、付加された言葉にはその事物の説明や描写として十分とはいえないものも見受けられる。また、日常生活についての翻訳では言葉が省略されているところがあった。省略されたことによって原文と訳文の内容に大きな違いが生じているところはない。しかし、省略せずに翻訳していれば、その場面の状況やイギリスの生活の特徴がさらに細かく日本の読者に伝わっていたはずだと見受けられるものもあった。

学校と日常生活の両方に共通して言えることは、イギリスの文化的特徴を強調するために言葉を付け加える場合があるということである。階級をはじめとした、イギリスの子どもの生活に根づく文化的な要素を翻訳する際に、イギリスの子どもの生活には欠かせないものが強調されたり、原文では直接表記のない事柄がむしろはっきりと描かれたりしている。松岡は、言葉の付加を施すことで、イギリスの子どものリアルな生活を翻訳においても露わにしようとしている。

このように、翻訳における言葉の付加によって、日本の読者が日本とは異なるイギリスの制度や風習を理解できるようにするとともに、イギリスの文化的特徴を明確にして

いると考えられる。また、言葉の省略については、省略することによって原文と翻訳の間には内容の違いは生じていないが、その言葉を省略しなければ、イギリスの文化の特徴がさらに細かく伝えられたといえるものもあった。

しかし、翻訳における言葉の付加や省略では乗り越えられない問題もある。イギリスの歴史的背景や宗教事情など現実の問題に、筆者の意図やイギリスの子どもたちの感情の変化も盛り込まれている。また、本作品ではハリー、ロン、ハーマイオニーなどの人名も、英語の音だけを生かして翻訳されているが、実は彼らの名前にもそれぞれ読み取れる意味があり、キャラクター設定に影響していると考えられる。これらを翻訳で表現しようとするれば、文章中でさらに細かく説明を加えたり、言葉を選んで翻訳したりする必要があると考える。このような手段をとることは、文章の読みやすさや読者である子どもの読解力を考えると、必ずしも最良の方法であるとは言えない。英日の文化的差異と言語的差異を埋め、歴史的背景や著者の意図をできる限り翻訳で表現しようとするのと、読者が滞ることなく読み進められることのバランスをとることが翻訳には求められる。原文の言葉ひとつひとつには、文章の表面上では見えない意味が込められていることがある。文化的差異や言語的差異を乗り越えるだけでなく、著者の意図や思いなど、言葉に表れていないが読み取ることに意味があることを表現することは非常に困難である。しかし、それらを翻訳で伝えようとするところこそが、海外の作品を翻訳し日本の読者に届けることの本来の意義であると考ええる。

参考文献

〈テキスト〉

- ローリング, J.K. 著、松岡佑子訳 (1999) 『ハリー・ポッターと賢者の石』 静山社
Rowling, J.K. (1997) *Harry Potter and the Philosopher's Stone*. London: Bloomsbury.
Rowling, J.K. (1997) *Harry Potter and the Sorcerer's Stone*. New York: Scholastic.

〈引用文献〉

- 井上好文監修 (2007) 『パンの事典』 旭屋出版
オルドリッチ, R. 著、松塚俊三・安原義仁監訳 (2001) 『イギリスの教育—歴史との対話』 玉川大学出版部
ケンプ, ジーン 著、松本享子訳 (1981) 『わんぱくタイクの大あれ三学期』 評論社
坂田薫子 (2014) 「ハリー・ポッターのイギリス (1) —「ハリー・ポッター」と現代イギリスに

おける人種問題―』『日本女子大学英米文学研究』49, pp.125-142 日本女子大学英語英文学会

坂田薫子 (2015)「ハリー・ポッターのイギリス(2)―現代イギリス社会における階級問題と政治―』『日本女子大学英米文学研究』50, pp.71-89 日本女子大学英語英文学会

野波侑里 (2002)「『ハリー・ポッターと賢者の石』におけるイギリス版とアメリカ版の比較研究」『大手前大学社会文化学部論集』3, pp.177-191 大手前大学

林雪絵 (2001)「『ハリー・ポッター』の秘密の教科書」データハウス

菱田信彦 (2013)「学校物語の伝統からみる『ハリー・ポッター』シリーズ」『平成24年度国際子ども図書館児童文学連続講座講義録 イギリス児童文学の原点と展開:家庭小説・冒険小説・創作童話・学校物語』 pp.91-111 国立国会図書館国際子ども図書館

ベルトン, クリストファー著、渡辺順子訳 (2004)「『ハリー・ポッター』Vol.1が英語で楽しく読める本』コスモピア株式会社

文部科学省ホームページ

<http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shougai/015/siryo/08102203/001/016/002.htm>2017/7/24閲覧

〈辞書・辞典〉

藤野幸雄編訳 (2004)『世界児童青少年文学情報大辞典15 補遺・索引』勉誠出版

松田徳一郎監修 (2000)『リーダーズ英和中辞典 第1版』研究社

OED オンライン

<<http://www.oed.com/view/Entry/31827?redirectedFrom=chipolatas#eid>> 2017/11/24 閲覧

Abstract

Harry Potter and the Philosopher's Stone (1997), written by J. K. Rowling, is one of the most popular works of children's literature. While it is a fantasy story, there are also some real aspects of British children's lifestyles. The present article examines how some aspects of British children's lives are represented in the Japanese translation by Yuko Matsuoka.

First, in order to compare the original and its Japanese translation, some translated sentences containing the elements of British culture were selected. When choosing these sentences, additions and omissions in the translation were focused on. Next, these samples were classified into (1) school life, (2) daily life, or (3) connotation. Additions seem to explain and emphasize things peculiar to Britain. However, they are not always sufficient to explain and emphasize the significance of British culture in the original story, and some omissions appear to be unnecessary. In addition, it was found that the images evoked by characters' names in the

original language are sometimes difficult to retain in translation.

The examination shows that Matsuoka was conscious of the importance of the cultural background of the story, helping Japanese readers to understand British culture, and thereby preventing certain significances peculiar to Britain from being lost in translation. Still, it is difficult to reflect the author's intention in translation.